



バレンタインスペシャル  
2012-opposite side-



sanuki soba

あと1ヶ月ほどでひとつ目の大学生活が終わる。

私は死ぬほど勉強して地方大学の医学部に学士編入を決めた。来年以降もまだ大学生だ。今は経済学部生、来年からは医学部生。こんなことなら高校時代から医学部を目指しておけばよかったと心から悔やむ。

楽しかった大学生活、というほどでもないが、まあ大学はそれなりに楽しかった。バイトをしてお金を貯め、それをすべて本に費やすという素敵な生活は大学くらいじゃないと送れまい。親のすねをかじる特権だ。勉強、バイト、本の3つさえあれば私は私は満足だ。

ただ、今は珍しくゼミの人たちと旅行に来ている。余計な時間を他人にとられたくない私はこういうイベントは避けてきたんだけど、今回は話が違う。どうしてもしなければならぬ明確な目標をもって私は卒業旅行で秋田に来ている。

\*\*\*

2月の秋田は、とても寒い。バカみたいに寒い。どうしてこんな寒い時期に雪しか見えないところに來たがるのか私にはさっぱりわからない。新幹線から降りた瞬間とバスから降りた瞬間の2回、こんなところに来たいと言い張った信宏を呪った。沖縄出身のこいつが雪を見たいと大騒ぎしたせいで秋田に来るはめになったのだ。卒業旅行ってもっと暖かいところや海外に行くんじゃないの？

5人しかいないゼミ4年生のうち私以外の唯一の女性である高橋さんと部屋に入ると、部屋にはしっかりと暖房が効いていたので安心した。これですきま風など感じるような部屋だったら私は信宏を絞め殺していたかもしれない。携帯も通じるトイレも綺麗、泊まる場所としては上々。部屋で荷ひどきをしながら高橋さんと「寒いね」「雪すごいね」などと毒にも薬にもならない会話をしていると、彼が部屋に来てこれから男3人は散歩に出かけるけどどうするか、と聞いてきた。正気か、と呆れていると高橋さんがどうする、とかぶせるように私に聞いてくる。行きたくないに決まってるじゃないか。

温泉に入ってみたいかと答えると高橋さんもそれがいいねと応じたので散歩を回避することはできた。その代わり女の子と2人で温泉に入らなければならなくなってしまうのではないか。肉を斬らせて骨を断つとはよくも言ったものだ。

案の定温泉は悲惨だった。もともと多弁ではないし1人でいる方が好きな私にとってお風呂で誰かとわいわいするというのはとてもじゃないが耐えられるものではない。まして女同士のどうでもいい会話など苦行に他ならない。シャワーの出が安定していたのは評価に値する。そう、最悪だったのは入り方であってお風呂ではない。

ただ、つまらない会話を表面的に続けるくらいの常識は私にだってある。

\*\*\*

私のいるゼミの男子は信宏と隆明、そして彼。信宏はただのお調子者だし、隆明はやたら理屈っぽい。ただ、どちらも鬱陶しくはないし嫌いでもないのは確かだ。隆明はなぜか女性に人気があるから見てると面白いことがしばしばあるし、信宏はあどけなさの残るお調子者加減だから別段害もない。男性陣に関してはたぶん、私にとっては恵まれたゼミだったのだろう。

そんな中にいる彼はゼミの中で最もまともな男として私に認識されている。真面目で地味で勉強家な上に異性とのかかわり方がよくわからないといういわゆるモテない君ではあるが、素直だし何より本をよく読む。本をよく読むというのは私の中では評価が高い。さらには本の趣味も悪くない。田山花袋が好きな作家だなんて面白いじゃないか。

ゼミのあとの食事にも出かけないし、ろくにイベントにも参加しない私がなぜ彼の趣味なんて知ってるのかというと、図書館で彼と会うことが何回かあったから。金銭的な理由で買わない新書版のコーナーに足を運んだとき、本を選んでいる彼を見かけることが続くうちに彼が読書を趣味にしていることがわかった。読むペースは私より遅いし、読む冊数も多くはない。別に読書が趣味というほどでもないらしいけれど本を選ぶセンスが良いというのは下手に濫読する読書家より信頼できる。

会って4回目くらいのときに、彼がロバート・B・パーカーの本を小脇に抱えているのを見て私はお茶に誘ってみることを決めた。ちょうど彼も都合があいていたらしくそこで初めて彼のプライベートを知ることができたのだが、その後も私は彼と会うたびに図書館を出てから喫茶店に行くようになった。面白いのは、2回目以降は私ではなく彼の方が誘うようになったということだ。だからモテないんだよ、とちょっと笑ってしまったが口には出さない。

男の子のプライドを傷つけないくらいの常識は、私にだってある。

\*\*\*

雪に興奮した信宏が障子を開け放したせいで驚くほど冷たい空気が窓際から迫ってくる男性陣の部屋で食事をいただき、私たちは彼らが温泉から出て宴会を開くまで部屋に戻ることにした。もちろん部屋に戻れば高橋さんと2人きりになるわけで、正直私は高橋さんが苦手だからあまり好ましい時間ではない。高橋さんは私を嫌ってはいないようだし、むしろよくかまってくれる方なのだがどことなく私を見下しているような感じがして好きにはなれない。

今までにもキャンパス内で会ったときや偶然一緒に取っていた講義が休講になったときなどは2人でお茶したこともあるし、客観的に見ればたぶん友達とっていいのだと思う。むこうが実際のところどう思っているかは知らないけれど、少なくとも2人有的时候に高橋さんの知り合いなどが通ると彼女はいつも私を「ともだち」といって紹介していた。いかにも女性らしい振る舞い。

ただ、そういう交友を続けているうちにわかったのは、最近高橋さんはどうも彼のことが気になっているみたいで、卒業までにはなんとかしたいと思っているらしいこと。明言はしていないけれど、色々と画策していることは一応オンナである私から見れば露骨過ぎるくらいだ。みんなのもつ豪快で澆刺としたイメージからは想像もできない可愛らしい恋心。

そんなに気になるのなら早く行動すればいいのに。早くしないと横からさらわれちゃいますよ、といわないくらいには私も大人だ。

男性陣が温泉をでてからの飲み会はいつもどおりの役割分担といえればいつもどおりだった。信宏は無駄に盛り上がり、姉御肌を前面に押し出した高橋さんと一緒にやたらと私に絡んでくるし、隆明と彼は仲睦まじく会話に華を咲かせている。隆明と彼は両方あまり友達の数が多いらしく、その分やたらと仲がいい。いつもと同じようにどこか冷めた態度で高橋さんと信宏の騒ぎを眺めていた。

酔っ払った高橋さんが「柳の男性遍歴を知ろう！」といいながら私を羽交い絞めにしてきたときは若干の苛立ちを感じたが、今後のことを考えるとここで怒ったと思わせるのは得策ではないな、と思い私は笑ってごまかすことにした。幸いなことに高橋さんも信宏も卒業旅行の無礼講ということですべてが許されると思っているらしく、私が苛立ったなんてほんの少しの想像すらしていないようだった。おめでとう人たちだ。

\*\*\*

私が高橋さんに対して明白な敵意と嫌悪感を抱いたのは去年の10月だった。例によって休講の暇つぶしで一緒に出かけたコーヒーショップで言われた一言が原因だ。

当時彼女は恋人にフラれたばかりで落ち込み気味だったのもあって、私は私なりに気遣っていたしそれなりに優しい言葉もかけていた。そんな中で彼女は「柳さんみたいにいつも1人でいればこういう風に落ち込んだりはしないんだろうね」と言ってきただけでなく「男に興味はないのか」「モテようとは思わないのか」などとどうでもいいことをつらつらと私に言った挙句「下手に男から人気ない方がラクなのかもね」とのたまった。

私は別に男から人気を得たいとも思わないし、人気がないと人から思われていようが別にかまわない。ただ、人からバカにされることだけは許しがたい。そのような発言を堂々としておきながら「おともだち」もへったくれもない。

高橋さんはどちらかといえばモテるタイプで、男性からの人気が高い。いつだか信宏も高橋さんを「美人じゃないけどなぜかモテるお姉さん」と評価していた。彼女はそうした評価を否定しつつも実際には当然だと思っている節がある。自分はモテるという自覚があるから私に対してああいう発言もできるのだろう。だから私は決心したのだ。あの女が気になっている男を私が奪ったとき、彼女はどのような表情を私に見せるだろうか、それを見てやろうと。

それは決して難しいものではない。彼が私に対して好意的な印象を抱いていることも若干の興味を有していることも知っていたし、女性から告白されたら簡単に舞い上がってしまうくらいには初心であることも知っていた。まして私のような自分から行動するイメージのない女性から告白されたらなおさら。勝率の低い勝負を仕掛けるほどバカではない。

せっかくのバレンタインデーにかかる卒業旅行、私はこの機会を逃す気はない。彼には少し申し訳ないけれど、目的のためには少しの犠牲はつきものだ。

\*\*\*

宴会が低空飛行を続け時計が2時を回る頃、信宏は部屋の隅で丸くなって寝息をたてていた。隆明と彼はさっきから熱心にラーメンの値段について激論を交わしているし、私は高橋さんの「美味しい卵かけご飯の作り方」論議を聞かされている。退屈だが、この後のことを考えるだけで私は笑いたくなる。

「2時かぁ」と隆明が時計を見てつぶやくと、高橋さんは「すぐ戻る」と言い残し部屋を出て行った。2人で用意したバレンタイン用のチョコレートでも持ってくるのだろう。どうせなら明日の夜にでもすればいいのに不思議な子。

飲み物を買いに隆明までもが高橋さんと一緒に出してしまったので彼と私が部屋に残された。信宏は寝ているから勘定には入らない、当然だ。せっかくの2人きりだが、こんなところで仕掛けるなんてバカなことはしない。不意に異性と取り残されて若干の戸惑いが手に取るようにわかる彼は、テーブルにあったポッキーを食べながら私にも勧めてきた。図書館帰りに会う度に思っていたけれど、2人きりになっただけでここまで緊張するなんてホントに初心なやつだ。その分御しやすいからこちらには好都合なんだけど。

ポッキーを受け取りながら「で、なんで彼女作らないわけ」と軽くからかってみる。ついさっきまで高橋さんと信宏にそのあたりを問い詰められていた彼は「柳さんこそどうなの」と探るような目で問い返してきた。少なくとも私の異性関係に若干の興味はあるらしい。わかりやすいやつ。私は思わず笑ってしまう。

彼は私を女性としてみている。そして今改めてこのタイミングで私が女性であることを再確認させた。上出来。

紙袋を持った高橋さんとコーラを持った隆明が部屋に戻ってくる。せっかくだから私も何か飲み物を頼めばよかった。テーブルの上には酒しかない。高橋さんは信宏を起こしてから紙袋から包みを取り出し「はいバレンタイン。柳さんと私から」と男たちに渡す。信宏は何が起こってるのかよくわからないらしい。寝かせておいてあげればよかったのに。

「こういうイベントなこと一切しないゼミだったよなあ」と隆明。せっかくだから一緒に食べようと提案されたのでご相伴にあずかることにした。大学生生活通産2個しかもらえなかったなあ、

と彼がつぶやくと高橋さんに大笑いされた。私も別の意味で笑う。

食べ終わる頃には外の吹雪はさらにひどくなっていた。憂鬱。信宏は再び深い眠りへと落ちてゆき、私と高橋さんも部屋に戻る。彼と隆明は猛吹雪の中で露天風呂に入ってみたいと寝ぼけたことを言い出して風呂場へ出かけていった。とりあえず今夜はまだ起きているらしい。私は勝負に出ることを決めた。

部屋に戻ると高橋さんは寝巻きに着替え布団に入る。私は携帯にたまったメールを読むふりをしながら彼に送るメールの文面を考える。布団の中から「なんで恋人作らないんだろうねー」と彼の話始める高橋さんはとてもほほえましい。大丈夫、明日にはきっと恋人ができてるから、とはさすがに言わない。私は適当な相槌をうちながらメールを書く。

ー2年生から彼女いないってのはホントだったんだね。もっと早くから確かめてればよかった。せっかくのバレンタインだからお伝えしておきます。私、あなたのことが好きですよ。ゼミで知り合った頃から。一目ぼれ。私と付き合ってくれるなら、大学生活3つ目のチョコをあげるから呼び出してねー

できあがった文面は我ながら私のイメージにぴったりないいものだと感心した。今から送ればきっと風呂上りに彼はこのメールを見るだろう。その後の反応が楽しみだ。

\*\*\*

卒業前だから聞いちゃうけどなんで柳さんは自分のことあまり話さないの、と高橋さんが尋ねてくるのと同時に私はメールの送信ボタンを押す。「そんなことはないよ」と返しながら内心では、だって話してもつまらないし、それに少なくとも今やっていることについては話す気はないわよと答えておいた。

さて、返事はいつ頃になるかな、と思っていたら電話に着信がある。彼だ。まさかこんなに早いとは思わなかった。おそらく私は勝負に勝ったのだろう。着信ボタンを押しながら「ごめん、サークルの友達から。ちょっと出てくるね」と高橋さんに言い残して私は部屋のドアを開ける。絶対に人前では見せない笑顔を浮かべながら。

「おバカさん、まだ何も知らないで笑っているのね」